国際理解教育を軸にした表現力育成に関する授業実践

－ドラマ学習を通した表現能力の育成について－

藤本　光司*1　　林　　徳治

A Study of the Expressive that did it Centering Education for International Understanding

－ Improvement of Expression Ability through Drama Study －

FUJIMOTO Koji and HAYASHI Tokuji

(Received December 2.2002)

はじめに

国際理解教育は、ユネスコの「国際理解のための教育（Education for International Understanding)」が出発点である。木村[1]は、国際理解教育の性格を次のようにまとめている。「第二次世界大戦後に成立したユネスコの国際理解のための教育は、その後、主権国家の存在を前提として、国家・国民・国民文化間の理解・協力・共存をめざす主張や実践を展開していきたい」とまとめている。国際理解教育への試みは、この性格を認識し時代に応じた動向に検討を加えながら進展してきている。

さて、経済協力開発機構(OECD)が、世界32ヶ国を対象に2001年12月に公表した『生徒の学習度調査PISA（Programmed for International Student Assessment)』の結果によると、日本の知識テストはトップレベルであったが、問題解決型の評価に課題が残ったようである。その一方で、「宿題や自分の勉強をする時間」が参加国中最低であったことも課題としてまとめられている[2]。これは今後、学びへの意欲や学ぶ習慣を身につけ、ひとり一人の個性や能力を最大限に伸ばしていく方向性を示唆している。また中教審が、2002年7月に発表した、『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』の趣旨において、「現状では、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受け、適切な評価が得られないといった事態も生じている。同時に、しっかりした国語力に基づき、自らの意見を表現する能力も十分とは言えない。」と危惧している[3]。

小・中学校の外国語教育は、コミュニケーション能力が重視されているが、これは英語科だけの課題ではない。本稿では、国際化時代にふさわしいグローバルな物の見方、考え方、国際化社会に対応できる資質の育成について、総合的な学習の時間の中で、表現力やコミュニケーション能力の育成をめざし、古くからイギリスで取り入れられているドラマ(drama）学習を活用した授業実践について述べる。

*1 宝塚市立安倉中学校

1　クロス・カルチュラルな見方や考え方

筆者がイギリスの日本人学校に勤務していた時、長く海外の現地学校に在籍した子女が、帰国後、豊かな表現力を発揮するが故に異質者としていじめに遭遇するという問題が持ち上がった。一般的にいじめの対象者は、何らかの障害を持っていたり、自己中心的であったり、逆に自己表現が下手な場合が多い。

クロス・カルチュラル（cross cultural）は“異文化理解”と訳されるが、外国生活を経験した子どもは、複数の物の見方や考え方を自然に身につけ、表現力が豊かな場合が多い。それがかえって、自己主張が強すぎると見られ、個より集団を大切にしてきた日本の風習の中では、自己主張は集団の和を乱し、“目立ちすぎ”といった風潮からいじめに発展することがある。ニューヨークやロンドン、シンガポールなど多国籍な人種で形成されている国際都市では、一歩町に出れば八百屋のおじさんは中国系、本屋のおばさんはドイツ系、学校においても、隣の友だちはインド系、前の座席はイタリア系など、日常生活の中で様々な異文化を吸収している。だから日本人にとって、外国生活そのものが国際理解教育であり、自然にクロス・カルチュラルな感覚を身につけていく。では国内においてはどうだろうか？　一般的に児童生徒が外国人と接する機会が多いわけではない。物の見方や考え方が、家庭や地域が中心になる。これを自文化中心的主義（Ethno-centrism）という。「Ethno」とは、民族・部族と訳されるが、自分の文化を愛し誇りを持つことに不思議はない。しかし、ナチスの反ユダヤ主義のように、その価値を絶対視して自文化以上のものはないと決めつけ他文化を排除しようとすれば紛争のもとになる。

さて、これに相対する言葉としてミルトン・ベネット(Benett,milton J.)の多文化相対視的主義(Ethno-relativism)がある。エスノリラティビズムとは、異文化に対して拒否することや、防衛的態度をとらずに受容からさらに異文化に対しても自文化に対しても統合的に見ることができる相対視的な態度のことを指す。図1は彼の異文化間の差異についての感受性の発達を表したものに日本語訳を加筆したものである[4]。

Denial 拒否　→	Defense 防衛　→	Minimization 最小化　→	Acceptance 受容　→	Adaptation 順応　→	Integration 統合　→
Ethno-centric 自文化中心主義の段階　→			→ 多文化相対視的主義の段階		

“Development of Intercultural Sensitivity”
図１　文化間感受性の発展

星野[5]は、この図に基づいて日本人の感受性を次のように分析している。「日本人の場合は、内外の区別、差異についての感受性・意識が強く、図では左寄りに位置していよう。拒否とまで極端でなくとも、相手に対して防衛的であったり、相手やその文化の価値を見下した評価（最小化）を行ったりしやすく、受容や順応を経て彼我の価値を相対視統合に至ることは難しい。」人が価値観を受容し相対視するためには、精神的なバランス感覚が必要とされる。バランス（balance）とアンバランス（unbalance）という言葉は、栄養のバランス、収支と支出のバランスなど身体的、数量的、心理的な平衡感覚を示す日本語の言葉として定着しているが、星野は、国際社会の舞台で発揮できればすばらしいバランス感覚を次の５つの点でまとめている。特に第3項目を維持しようとする態度が国際人育成の重要な点であると述べている。

(1)自分の建前の言明と本音の表出との間におけるバランス
(2)自己の尊重と異文化に属する相手とを尊重することとの間のバランス
(3)自己を主張し自説を用いて相手を説得すること、相手の言い分を聞いて納得することの間に生じる発信と受信のバランス
(4)異文化理解における認知（知識・認識）と情意（感情と意欲）と行為（言語、動作の自発的行為）の間のバランス
(5)自文化中心的態度と多文化相対視的態度の間のバランス

クロス・カルチュラルな見方や考え方を身につけさせるためには、異文化に対して「違い」を「違い」として認めるバランス感覚が大切である。先に述べた帰国子女のいじめの問題が、子どもの世界では“目立ちすぎ”という意識から“表現力がすごいな”、“私もあんな風になりたい”といった、違いを受容し、一種あこがれ的な態度に変容させることが大切であり、子ども達の言語・非言語の表現力を豊かにすることが、多文化相対視的態度の育成につながると考える。

2　本校の総合的な学習の時間について

さて、筆者が実践したドラマ学習を述べる前に、本校の教育課程の体系と総合的な学習の時間に位置づけた方策について説明する。

本校の教育目標は、「知恵を磨き、感性を磨き、心を磨く」である。生き抜く力を培い、自他を大切にできる人間の育成。心に響きあえる感性を養い、共に励まし合いながら歩める人間の育成。みんなと協力しながら、共に高め合う人間の育成をめざしている。そして、この目標を達成するための基本方針として、人間尊重の精神を基盤とし、学校を「心と体

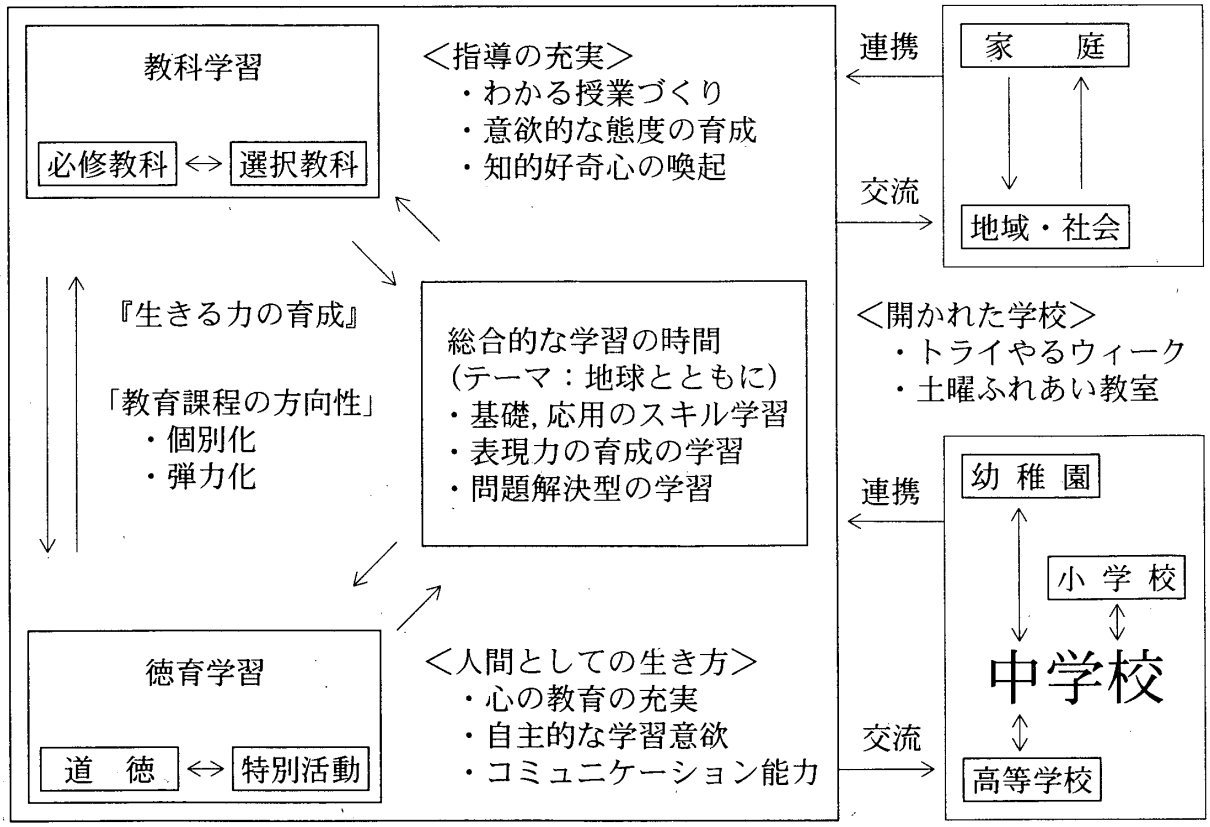


図２　本校の教育課程の体系図

と頭を鍛える場」としてとらえ、国際性豊かな生徒の育成に教職員共通の理解のもと、一貫した指導と研修を継続している。本校の教育活動を図2に示す。

本校では、新しい教育課程が実施される4年前（1999年度）から総合的な学習の時間の実行委員会を設け組織的に取り組んでいる。筆者が担当したドラマ学習は、総合的な学習の時間の「表現学習」の中で行っている。本校の総合的な学習の時間の特徴は、教科学習では補いきれない領域（技能）を、スキル（skill）学習として充実させ、問題解決型の学習を中心に、その思考成果を発信する表現学習に重点を置いている。

スキル学習は、図3に示した①調査スキル、②記録スキル、③プレゼンテーションスキル、④テーマ探索スキルの4つの柱で構成している。このスキル学習は、１年生で基礎スキル講座を16時間（4時間×4クラス　※2時間を一単位とし）、2年生で応用スキル講座を16時間（4時間×4クラス）受講する。授業の形態は、クラス単位で全32時間をローテーションする。もう一つの軸は、表現学習で、4つの基礎スキル、応用スキルを終えた後、スキル学習と同様に表現方法を学習させる。その内容は図4に示したが、①IT（Information and Technology）表現、②News Paper（壁新聞など）による表現、③メディア活用の表現④ドラマによる表現で構成している。

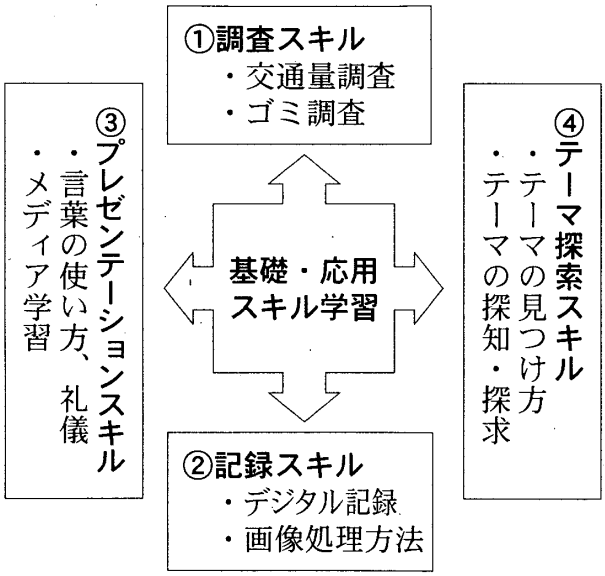


図３　スキル学習

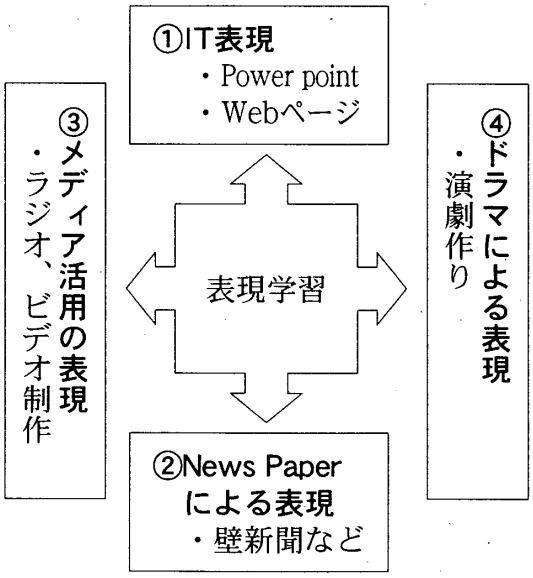


図４　表現学習

スキル学習名	①調査スキル	②記録スキル	③プレゼンスキル	④テーマ探索スキル
発表学習名	①IT表現	②NP表現	④ドラマ表現	③メディア表現
１年生	広田（数学） 田ノ岡（技術）	九里（理科） 清水（体育）	西山（国語） 辻本（音楽）	塩田（英語） 北村（社会）
２年生	浅田（社会） 河西（国語）	梶永（美術） 西畑（数学）	藤本（技術） 藤井（社会） 中村（英語）	長瀬（理科） 朝井（体育）
３年生	熊城（数学） 藤野（社会）	大月（国語） 常石（理科）	荒木（英語） 神崎（国語） 岸　（体育）	大山（美術） 鈴木（音楽）

表１　教師の役割分担表

筆者は、講座の調整、組織作り、講師依頼に従事するとともに、図３－③の「プレゼンテーションスキル」と図４－④「ドラマによる表現」のチームに加わった。

これらの取り組みで苦労した点は、教師のグループ作りである。表1に示したように、学年の垣根を取り去り、全教師が適材適所に応じて担当する。教師のグループを構成するための留意点は、教科間を横断化するために一部の教科に偏らせないこと、老若男女をミックスすること、必ず各班にリーダーを位置づけることである。人数の構成は、1グループが5,6人（各学年2～3名）とし、各グループでレシピ（指導案）や生徒用ワークシートを考えることとした。会議回数を減らすために各グループリーダーで実行委員会を構成し、必要に応じて各グループで学習会を持った。総合的な学習の時間を学年の単位で進めても、ノウハウの蓄積や学校全体の流れを作るのが難しい。その点、全教師がグループの責任として授業研究を行うことで、総合的な学習の時間における各教師の責任が明確になるとともに、学校としての流れを継承してくことができる。

3　異文化吸収の適応ステップを用いたドラマ学習

家庭科の授業において、食生活という身近な話題をもとに、自己の中にある異質な存在に気づかせる方法がある。「お雑煮の味はどんな味？みそ味？醤油味？具は何が入っている？」、「おせち料理は、どんな内容が詰まっている？」。こんな風に質問すると様々な反応が返ってくる。子どもたちは、友達とのコミュニケーションの中で、家庭の食や生活文化の違いを受容していく。しかし、全く異質な文化的差異の話は、表面的な理解に終わることが多い。例えば、北朝鮮などの第三世界の生活を見た時、テレビや読み物の情報だけでは、“なんて悲惨な生活なんだ”、“こんな所に生まれてこなくてよかった”、“あの人たち

ステップ	ステップの内容
Step 1 : Denial（拒否）	文化的差異を否定
A．Isolation	文化的差異を意識しない
B．Separation	文化的差異から意識的に目をそむける
Step 2 : Dfense（防衛）	文化的差異を脅威として受けとめる
A．Denigration	他集団の文化を意識的に否定的に受けとめる
B．Superiority	自ら属する集団のもつ文化を意識的に肯定的に受けとめる
C．Reversal	自ら属する集団を否定的に、他集団を肯定的に受けとめる
Step 3 : Minimization（最小化）	文化的差異よりも共通点に目を向ける
A．Physical Universalism	差異よりだれでも生物的に「人間」であるということに注目する
B．Transoendent Universalism	差異より歴史、政治、経済的な影響下にあることに注目する
Step 4 : Acceptance（受容）	文化的差異は認められ、尊重される
A．Respeot for Behavioral Differences	行動の差異を尊重する
B．Respeot for Value Differences	価値観の差異を尊重する
Step 5 : Adaptation（順応）	異文化出身者とのコミュニケーションの技術を身につける
A．Empathy	差異を認めた上で、他者の見方を理解する
B．Pluralism	複数の文化の見方を身につける
Step 6 : Integration（総合）	文化的差異をかえた自己を確立
A．Contextual Evaluation	言動を「文化」ではなく、コンテキストによって判断する
B．Constructive Marginality	文化的な境界をこえた自己を確立する

表２　異文化を吸収する時のステップアップのモデル

は、かわいそう”という感想に終始しがちである。これは、学習者の感情面における優越感や嫌悪感を与える危険性が生じる。つまり、異質を伝えるためには、事実と同時に心情面や感情面での理解を深く促すことが必要で、心理的イメージと視覚的イメージを融合することによって促進される場合が考えられる。一例を挙げると、国語の教材で『次郎物語』を教えている際、白いおにぎりが砂によって汚れるというイメージは、文章だけでは深く情に訴えられない。本物のおにぎりを見せて実際に汚してみると、主人公の心理状態が視覚化し、より次郎のくやしい気持ちを読みとらせることができる。

ドラマ学習で生徒が提案したテーマの一つに、2001年9月にニューヨークで起きた、同時多発テロの問題があった。その生徒は、はじめテロリストの問題を、西側諸国の立場でストーリー展開させていたが、調査を深める中で、ベトナム戦争やイスラム文化に広がると「なぜ？」という疑問が生じ、多角的な視点で異文化を理解する心情に増幅する。

表2は、先に紹介したベネットの異文化に適応していく時の心理的状態のステップアップモデルである[6]。そして表3は、ドラマ学習におけるグループワークの活用例である。総合的な学習の時間を進める時、生徒が自分でテーマを見つけられない事が、課題としてよくあげられている。

スキル講座のWebbing学習で、興味や関心を広げ、生徒個人やグループのテーマを決定する時、このモデルの活用が有効である。グループワークで考えたテーマの一例を紹介すると、「尊い命を自ら絶つ青少年の物語」、「温暖化から青い地球を守る調査団」、「耳の聞こえないY君との友情物語」、「出会い系サイトにおける子どもと大人の心情、隠された罠」などである。

発達の流れ／テーマ	“同時多発テロにおける戦争問題について”
Step 1 : Denial（拒否）	戦争は怖い、参戦すべきでない
Step 2 : Dfense（防衛）	戦争は命を守るために戦争には参加しない
Step 3 : Minimization（最小化）	彼らはどんな暮らしをしているのだろうか？
Step 4 : Acceptance（受容）	日本人とは違う中東の民族問題を考えて見る
Step 5 : Adaptation（順応）	アメリカとの中東の歴史的背景と日本の立場
Step 6 : Integration（総合）	国連の考えと世界平和について

表３　ベネットのモデルを活用した事例

4　欧米から学ぶプレゼンテーションの評価方法

国民性や文化、習慣の違いにも関係するが、日本より欧米諸国の児童生徒の方が豊かな自己表現を身につけているといわれる。これは欧米諸国の学校が、早くからプレゼンテーション能力の育成を強く認識し、社会に浸透させてきたからである。欧米人の自己表現力が上手とされるのは、プレゼンテーションの学習に費やしている時間の差である。

Speech Evaluation（評価）	
Volume ……（声の大きさ）	
Projecting ……（声の通り）	
Pacing ……（話をするペース）	
Fluency ……（流暢に話しができるか）	
Clarity ……（明瞭さ）	
Eye-Contact/Panning ……（視線あわせ／振り向き）	
Posture ……（伝えようとする姿勢）	
Expression ……（内容の表現）	
TOTAL　総合評価	
1：Very Good（大変よい）、2：Good（よい）、3：Bad（悪い）	

図６　Secondary Schoolで利用されている評価カード

筆者のイギリスでの聞き取

り調査[7]では、幼稚園から高等学校までの間に、授業の成果発表の場を多く設けている。この発表で求められるものは、内容だけでなく声の大きさや姿勢、態度といった表現能力の育成に関わることが重視されている。そして、これらの経験が高校生ぐらいになると、堂々とプレゼンテーションができるようになる。

さて、総合的な学習の時間は、教室での一斉授業とは異なった能動的な学習活動が求められている。そこで、学習活動の成果発表の場を設け、表現力をスキルアップする取り組みを構築した。その中で、イギリスの中等学校（Secondary School）で活用されている評価カード[8]を活用した。図6に示した評価カードは、生徒の単なる感想としての善し悪しではなく、評価リストの項目に従って評価を下すのである。これは演技者と聴衆とのコミュニケーションが成立したかどうかを評価する項目である。　特に「⑥Eye-Contact/Panning（視線あわせ/振り向き）」や「⑦Posture（伝えようとする姿勢）」は評価の重点項目である。「⑥」の留意点としては、「発表者が発表中に聴衆と目を合わせたか？　厳しくチェックしよう！」という項目である。アイコンタクトは、伝えるための熱意であり、内容に自信があれば伝えたいという意気込みが自然に表出される。逆に聴衆と一度も目を合わせない発表は、発表とは認めないということである。シビアであるがこの積み重ねが大切である。そして同時に聞く側がしっかり発表者を見て聞いたかということを問うことにもなる。総合評価は、発表者がいかに聴衆とコミュニケーションできていたかを問うとともに、ドラマ学習では心情を表す演技力も評価の対象となる。

5　イギリスのdrama学習について

イギリスのナショナル・カリキュラム（The National Curriculum）、いわゆる全国共通教育課程では、コンピュータを教科の枠を越えた学習支援の道具として活用することを重視している。表4は、その利用状況を示している[9]。注目する点は、日本の国語にあたる教科「English」における利用頻度が高いことである。なぜなら、「English」の中にメディア学習が位置づけられ、情報を活用する場面が多いようである。その事例としてdramaやrecordings、live talk and presentationがある。

初等学校	よく利用する	たまに利用する	あまり利用しない	全く利用しない
国語	52%	44%	3%	0%
算数	22%	66%	12%	0%
理科	6%	55%	35%	3%
技術	1%	27%	48%	23%
中等学校	**よく利用する**	**たまに利用する**	**あまり利用しない**	**全く利用しない**
国語	9%	59%	31%	1%
算数	7%	55%	36%	2%
理科	6%	57%	36%	1%
技術	34%	51%	15%	1%
ICT	98%	2%	0%	0%

表4　イギリスのパソコンの利用

イギリスのdrama学習は、教科「English」の一領域であるが、ナショナル・カリキュラムが導入される1988年以前は，イギリスの中核教科の一つであった。現在でも、16歳で全生徒が受けなければならない全国統一試験GCSE（General Certificate of Secondary Education）において、人気の高い選択領域である。

ナショナル・カリキュラムに明記された、drama学習の内容は次のように示されている。

① アイデアや問題の意味を探求し、あらゆるドラマチック効果を活用しながら表現する。

② 自ら台本を書き、様々な方法で動きや役柄、場面、緊張を伝える。

③ 場面の構成が、ドラマらしい効果であるか相互に評価する。

④ これまでに見たドラマや関わったドラマに対して、その演技を批判的に評価する。

では、教科「English」が、メディア学習や情報教育とどう関連しているかであるが、教育省のWebサイトNGfL(National Grid for Learning)の中の“The role of ICT”に、「ICTとして、次の点でdramaに対して生徒の学びを強化することができる。」と記載され、その内容は次の5点に要約されている[10]。

① 演技や調査を司るための情報活用の手段。
② 活動方法の多様性を表現していく機会。
③ Webサイトからの台本の引用。
④ 電子メールを活用した意見交換の機会。
⑤ 文化行事とのコラボレートや参画する機会。

このように、ナショナル・カリキュラムでは、「English」の領域に情報を活用する手段が明記され、日本の国語教育とは少し違った視点の学習活動が設定されている。

日本の学校教育の場でも、演劇は、文化祭などのクラス劇として取り組んできたが、授業としての位置づけはない。しかし、総合的な学習の時間の表現活動として運用することは十分可能で、期待すべき表現活動の分野である。

6　Webサイトを活用した脚本作り

過去3年間は、Web上で見つけた借用可能とされる台本を使用し、その台本に脚色を加えながら表現力向上のスキルを探った。このWebサイトは、演劇に関する基礎知識や演劇表現のトレーニング方法も掲載されているので、意欲的な生徒に対しては、舞台芸術に関する専門的な知識をWeb上で学習させることができる[11]。その脚本内容の一部を次に示す。

平成11年度の脚本、『もう一人の私に　～Good　Bye mine～』
“未来の自分を少しだけ教えてくれる。”そんな人に出会ったら、あなたはその運命を教えてもらいますか？　それとも聞かないでおきますか？　第１幕は、人間を世の中に送り出す世界。一人の不幸の代わりに一人の子どもが誕生する。夏希、秋、冬彦、そして春香・春美はその順番を待っている。第２幕は、老人が教えてくれたそれぞれの運命とは、手足の不自由な少女、受験勉強に苦しむ少年、非行に走る少女、コインロッカーに捨てられる赤ちゃん、誕生を待っている子どもたちはどのような選択をするのだろうか？「生きること！」「本当の幸せとは？」を問いかけた作品。
平成12年度の脚本『クリスマスキャロル　～マッチ売りの少女が聖夜に～』
街はクリスマスで大賑わい！森山愛は役者修行中の身、矢島和希は普通の会社員だが交通事故で命を失ってしまう。その魂を見習い天使の三太（サンタ）が天国に届ける途中にうっかり落としてしまう。愛の体に入り込んだ和希の魂は、“想いの結晶”だった。さあ大変！先輩天使ミカエルと必死に捜索をするのだが、悪魔のジンも地獄からの命令で魂を狙っている・・・。愛の芸術仲間のシュウはミュージシャン志望。彼はいつも寂しげな高校生レイに心を惹かれていく。しかしレイは孤独を売る「マッチ売りの少女」だった。和希の魂にはどんな“想い”が詰め込まれていたのか、受取人に届けられるのか・・・。なぜレイは孤独と戦っていたのか？　マッチに記された電話番号とは？　人を愛すること、愛されることは？　原作のクリスマスキャロルをもとに現代風にアレンジした作品。

平成13年度の脚本『たとえれば星のかけら　～もうひとつの銀河鉄道～』
「銀河鉄道の夜」を、貧しい孤独な少年ジョバンニが、夢の中で唯一の親友カンパネルラと夜空の世界を旅する、と一言で要約するにはあまりにも深く悲しく、謎や魅惑に満ちた物語である！少年の貧しさと孤独の背景には、父の不在、母の病、同級生のいじめといった環境ばかりでなく様々な苦悩が込められている。夢の旅といえば簡単だが、それは死者達の乗る汽車、路線は夜の大空を銀河の流れに沿って巡っていくのである。同行する親友は級友を救おうとして溺れた末の死出の旅路上にある。今回の作品は、原作以外に臓器移植、テロ行為、麻薬といった社会問題もモチーフしています。劇中の授業シーンでは、これから始まる総合学習の取り組みも少し織り交ぜています。さあ、銀河鉄道の世界をともに旅しながら、生きること、ほんとうの幸せとは一緒に考えてみてください！

脚本の選択にあたり教育的な視点を、平成10年に発表された中教審答申、『新しい時代を拓く心を育てるために、「次世代を育てる心を失う危機」』に示された、第１章、「未来に向けてもう一度我々の足下を見直そう」に着目し[12]、具体的には、ドラマ学習の教育的な価値観として、次のように位置づけた。初年度の『もう一人の私に』では、細則(2)の「②正義感」、「③生命と人権」、「④他者との共生」を軸に、「身体障害者」「受験」「非行」「幼児虐待」の問題に視点を絞り、『クリスマスキャロル』では、細則(3)の「①利害得失の優先問題」、「③モノ・カネ・快楽の優先」、「④社会への真摯な努力」を軸に、「情報社会の影」や「援助交際」の問題を考えさせた。ここで述べた、中教審の答申内容を以下に示す。

(1)「生きる力」を身に付け、新しい時代を切り拓く積極的な心を育てよう

(2)正義感・倫理観や思いやりの心など豊かな人間性を育もう。“子どもたちが身に付けるべき「生きる力」の核となる豊かな人間性とは”

①美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性

②正義感や公正さを重んじる心

③生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な論理観

④他人を思いやる心や社会貢献の精神

⑤自立心、自己抑制力、責任感

⑥他者との共生や異質なものへの寛容

(3)社会全体のモラルの低下を問い直そう。“子どもたちに豊かな人間性が育まれるためには、大人社会全体のモラル低下を問い直す必要がある。我々は次のような風潮が、子どもたちに大きな影響を及ぼしていると考える”

①社会全体や他人のことを考えず、専ら個人の利害得失を優先すること。

②他者への責任転嫁など、責任感が欠落していること。

③モノ・カネ等の物質的な価値や快楽を優先すること。

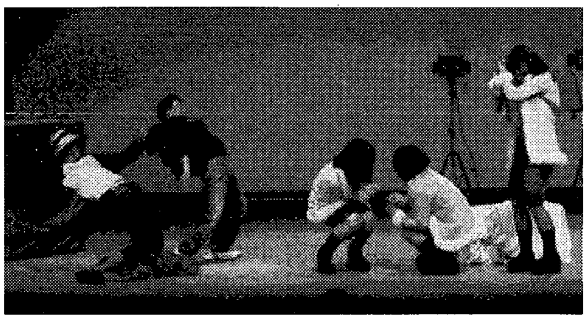
④夢や目標の実現に向けた努力、特に社会をよりよくしていこうとする真摯な努力を軽視すること。

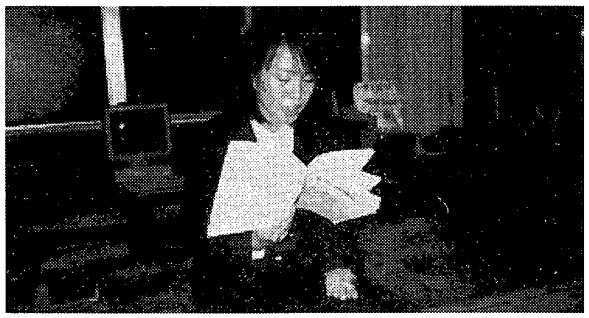
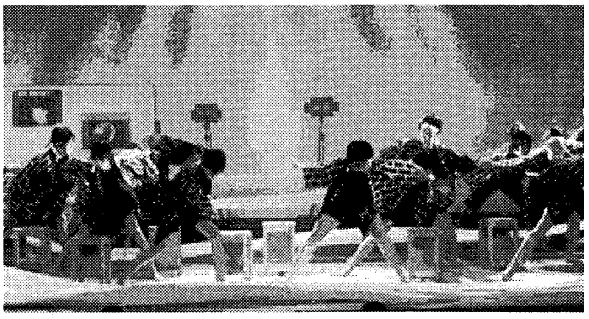
⑤ゆとりの大切さを忘れ、専ら利便性や効率性を重視すること。

(4)今、なすべき事を一つ一つ実行していこう。

7　表現力を高めるためのスキル

グループワークとして、言語・非言語の表現力の育成に様々な手法がある。「ロールプレイ」は、様々な状況を演じることで新しいスキルを自ら経験することができる。すなわち、子どもたちには、想像できない不便や不安についてその状況の心情を深慮しながら演じると現実的な一側面を捉えさせることが可能である。「ブレインストーミング」は、アイデアや提案を生み出すための創造的な方法である。その留意点は、①グループメンバーの発言に対する批判的な態度の禁止、②できるだけ自由奔放な発言を行う、③質より量で発言する、④他人の発言への相乗りが可能である、⑤自己激励と相互激励の雰囲気でおこなうことと示されている(13)。また、古代ギリシャ、ローマ時代から継承されている演劇のジャンルに、「マイム」がある。これは物真似芝居、身振り芝居というが、パントマイムは、無言で演じる短い演劇であり、その中にコミカルな要素（笑い）が必要とされる。また非言語の手法として、手話の活用が考えられる。例えば、「“麺類を食べる”を非言語で表現してみよう」という課題に対し、同じ麺でも、それが「うどん」なのか「ラーメン」なのか「焼きそば」なのか、この3つ食材を手話表現として、具体的かつ豊かに取り組ませることで、表現力のスキルアップにつながる。手話表現で求められるのは、手だけではなく顔の表情や身振り素振りも要求される。



言語表現の豊かさを育成するのは、国語科の指導領域に大きく位置づけられるが、喜怒哀楽を、ショートストーリーで場面設定し、その場面に応じ、演じてさせるのも一案である。例えば、「友人の死」というテーマに、「静」と「動」の表現を交え演じるのである。ストーリーは、「昨夜会って話をしたばかりの友人が死んだ。遺体にすがりついて泣く。聞けば自分と別れた直後に事故にあったという。もう少し引きとめていれば、と悔やまれて仕方がない。残念でならない。ますます辛く空しくなり、泣き叫ぶ」である。これを脚本にすれば、「おい、嘘だろう・・・・。昨日会ったばかりじゃないか。○○（名前）・・・、おい、どうしてだよ！　来週ドライブに行くって約束したじゃないかよ。・・・・え、昨日の9時にはねられた？　ちょっと待ってくれよ、オレ、8時半まで喫茶店に一緒にいたんだ・・・・・」(14)という内容で進める。　このように、いくつかのテーマを設定しそれを

繰り返す。様々な劇的なシチュエーション、その人の置かれた立場、心情を理解させながら表現させることが大切である。徐々に表現力が向上していく。この時の秘訣は、生徒相互の演技活動を楽しませることである。生徒が楽しんでいれば、「先生、次のテーマは何？僕らが決めたいな！」というように、段階的な意欲向上と生徒個々の課題発見につながる。

林は[15]、効果的なプレゼンテーションを、「聞き手の状況やニーズを的確に把握していること、伝えたいことが明確になっていること。表現がわかりやすく的確であること、柔軟な対応やアドリブ性に富んでいること、ユーモアや笑いがあること、熱意があってそれを態度にうまく示せること」まとめている。

表現力育成について、イギリスのdramaをヒントに実践してきた。これらの実践は、総合的な学習の時間の中で行っているが、学校全体として取り組むことで、総合的な学習、必修教科、選択教科が横断的に結びつき知識の総合化が図れる可能性を見いだしている。今後、生徒に求めた意識調査や卒業生の追跡調査をもとに、授業分析を行っていきたい。

【引用・参考文献】

(1)木村一子、『イギリスのグローバル教育』、勁草書房、2000、pp01-02

(2)経済協力開発機構、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」、http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm、2001.12

(3)文部科学省、『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』、http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki/daijin/f_020714.htm、2002.7

(4)Bennett, Milton, J、"Toward ethno relativism.", *Education for the intercultural experience.* Yarmouth, ME: Intercultural Press、1993

(5)星野命、『国際化時代に求められる資質・能力と指導「バランス感覚」』、教育開発研究所、pp.72-75、平成8年

(6)Bennett, Milton, J、" A developmental model of intercultural sensitivity." In R.Michael Paige (ed.), *Education for the intercultural experience.* Yarmouth, ME: Intercultural Press、1993

(7)藤本光司、『国際理解教育に関する研究（ロンドン日本人学校での授業実践を通して）』、宝塚市教育総合センター研究紀要（第57号）、pp25-43、1996

(8)Acton high school "live talk and presentation"、1992

(9)National Curriculum Council Report (1999)、"*Information and Communication Technology 5-16*" : The Consultation Report, National Curriculum Council

(10)The role of ICT、http://www.standards.dfee.gov.uk/ National Grid for Learning/

(11)演劇総合サイト「ステージファン」、http://www.stagefan.com/

(12)中央教育審議会、『新しい時代における教養教育の在り方について』、www.monbu.go.jp

(13)JKYB研究会翻訳、『WHOライフスキル教育プログラム』、1997、大修館書店、pp4-5

(14)柳谷行宏、『基礎から始める演技トレーニングブック』、2000.6、大様出版、pp28-29

(15)林徳治、『情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術』2000.7、ぎょうせい、pp50-51